

接続教育と教育連携

— 高大接続と高大連携を中心に —

中 村 博 幸

1. はじめに

大学と高校の関係について、「接続教育」、「連携教育」ということばが聞かれる。しかしそのうちのいくつかは「接続」と「連携」が混同され、教育現場に混乱を招いている。そこで、教育の場における「接続」と「連携」の違いを明らかにした上で、今必要とされる高大接続と高大連携の教育についての提案を行う。

2. 連携と教育

(1) 連携…パートナーシップ

連携とは、「同じ目的を持つ者が互いに連絡をとり、協力し合って物事を行う事」（広辞苑）であり、いわゆる接続教育の中には、目的、協力…から連携教育といえないものの多い事がわかる。すなわち「連携」は異なった組織体が、ゆるくつながりながら、ある目的の為に協力する事であり、様々な分野からコラボレーションしながらプログラムを実施し、成功に導く事である。

したがってそのパートナーシップは、教育関係者ばかりでなく、企業、自治体、地域の人々、また学校内では、保護者、同窓会などにも広げることができる。

(2) 教育の場における連携

上で見た様に、連携は様々な場面で様々な組織間で行われる。すなわち教育の場面で教育を対象とした組織間の連携は、連携

全体の一部である。ここでは「教育」の組織を含む連携を主に取り上げる事とする。さらに、連携の内容に、児童・生徒・学生を含んでいるかどうかも考慮されなければならない。

例えば地域との連携を例にあげて説明する。表1に地域と学校の例をあげる。

連携の例の右側はその校種の児童・生徒・学生が対象であるが、左側は主に成人を対象とする連携である。

表1. 地域と学校の連携の例

	連携の例	
地域と小中学校	学舎開放	子ども会
地域と高校	コンピュータ講座	福祉・介護等体験 職場体験
地域と大学	公開講座	インターンシップ

本論では、後述の接続教育の観点から、児童・生徒・学生を対象とするものを扱い、連携教育と呼ぶ。したがって、学校の教職員の研修などの教育は含まない事とする。

(3) 教育内容を含まない連携

上に述べた以外にも教育の場（組織）における連携には、教育内容を含まない連携が、大学を中心に考えられる。例えば産学協同であったり、地域社会との連携において同じ立場で、商店街の活性化、観光資源の開発などの問題解決を図る事などがある。

ここではこれらの連携にもこれ以上言及しない。

3. 教育の接続

連携は組織から見た立場であったが、教育の主体者である児童・生徒・学生の視点からは教育の接続が考えられる。

(1) 教育場面の接続

学校教育はともすれば、閉鎖された学校という場だけで完結する事が多い。校外学習であっても、場が校外に移動するだけであくまでも“授業、的に行われる。

それに対して、最近では課題解決学習や社会人基礎力など、学校と学外がボーダレスに繋がりつつある事も作用して、教育場面の接続が多くなっている。例えば、中学校における職場体験、小中学校における博物館・美術館教育、大学におけるフィールドワークなどがそれであるが、普通に接続教育という場合は、以下に述べる教育プロセスを言う事が多い。

(2) 教育プロセスの接続

一般に教育の接続について話される場合は、子どもから大人への発達に応じた教育システムの接続をいう。すなわち幼稚園・小学校・中学校・高校・大学・社会の間の接続である。(もちろん専修学校・高等専門学校との接続も含まれる。また短大・大学院は広義の意味で大学に含める。)

ここでは教育プロセスの接続の範囲を以下のようにして、その為に行われる教育を接続教育と呼ぶ。

接続教育

ライフサイクルを、ライフステージで切った時の、前の教育場面から次の教育場面へのスムーズな移行を目的とした教育を言う。特に連続性のある接続の場合を重視する。

(3) 学習主体者からの視点と教育主体からの視点

現在の学校制度は連続的に成長していく

個人を、教育システム上分割している。

(図1.a) 各学校段階は成長過程に応じて、それぞれの教育形態で教育が行なわれる。その結果、連続的に成長していく子どもを、階段状の学校制度で教育していく事になる。(図1.c左及び中央)

もちろん同一校種の低学年と高学年の教育方法にはそれなりの配慮がある。(特に小学校の低・中・高学年。)しかし、小学校5年から6年の差や中学校1年から2年の差より、小学校6年から中学校1年の差は大きい。(中学校から高校へも同様。)しかも、最高学年から最低学年への移動に伴う精神的な影響はもっと大きい。そこで上位校種にスムーズに移動し適応する為の接続教育が必要となる。(図1.c右)

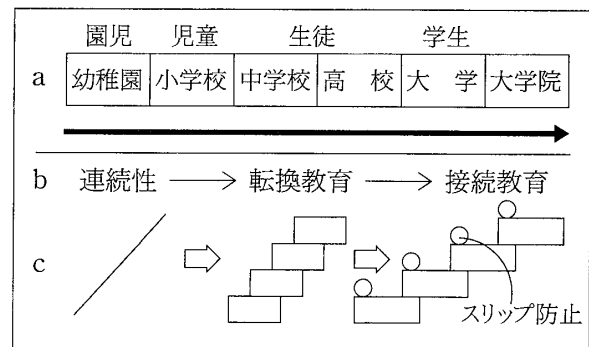


図1. 接続教育と転換教育

(4) 接続教育と転換教育

下位校種から上位校種への移動(転換)に伴う教育形態の変化に対して、生徒・学生は無意識的に対応しクリアしてきた。しかし、そこには様々な背伸びや葛藤があったのではないだろうか。

そこでスムーズな接続教育が行われれば、学習者の負担は少なくなるが、一方では、上位校種の教育目的や教育方法などの教育スタイルを理解しないで下位校種の教育スタイルのまま学習を続ける可能性もある。特に、高校や大学では学習目的や学習意欲が明確でないまま進学するとそれぞれ中学生、高校生の延長形として学習を続ける事になる。つまり上位校種のスタイルへの転換教育が必要となってくる。(図1.b)

接続教育と転換教育のバランスをとりながら、校種移動期の教育を行う必要が生じる。

(5) 小中及び中高の接続教育

大学を中心とする接続教育は後で詳しく述べるので、ここでは他校種の接続教育について軽くふれておく。

①小学校と中学校の接続教育

中学生としてサークルや地域での活動範囲が拡大したり、学校に適応できず不登校になったりする。また学習方法についても変化があるので、主に生活面での接続教育が行われる。

②中学校と高校の接続教育

国語・数学・英語等の基礎学力がないまま高校に進学してくる生徒の増加から、学力保障（補習）などの形で、比較的早くから行われている。

4. 大学における接続教育

大学における接続教育の場面には3種類ある。(図2) すなわち、高校と大学(入口)、大学と大学院または社会(出口)、そして基礎教育から専門教育(内部)の3種である。

(1) 接続教育の視点

①考え方

a. 不足している事の補填

下位校種で修得すべき学力や学習方法が十分でない場合に行われる。補習教育、リメディアル教育などが主である。

b. スタート台に立つ

主に上位校種側で行われる。心構えなどが中心である。

c. これからのシステムの理解

カリキュラムや学習方法などのオリエンテーションや、ラーニングスキルなどの学習が行なわれる。

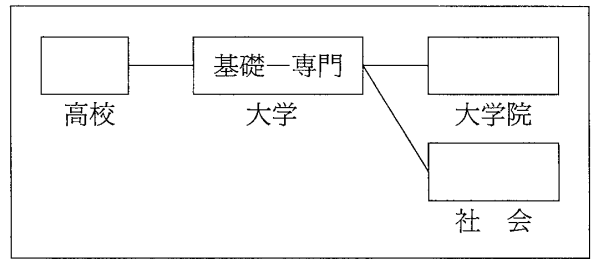


図2. 大学における接続教育の場面

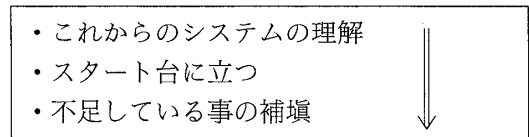


図3. 接続教育の順序

②内容

“心構え、を中心とした〇〇入門的なもの。そこで要求される考え方、必要とされるスキルなどに分けられる。

(2) 高校と大学の接続教育の必要性と内容

①大学生の高校生化…高度な高校生

大学生が高校生化（幼稚化）しているとよく言われる。しかし高校生といったくくりではなく、高校1年、高校2年、高校3年といった成長プロセスで見た時、大学1年は高校4年といったくくりとなる。

すなわち、高校生のまま（学生でなく生徒、考えるではなく教えて貰う等）で成長を続けると考えられる。(図4) その視点で見ると、保護者への成績の送付なども、一人前の大学生に対する理不尽な行為と捉えるより、知られると恥ずかしいという視点で考える方が頷ける。

そこで、もし従来の様な大学教育のシス

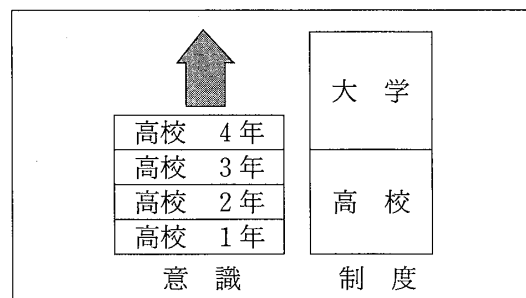


図4. 高度な高校生

テムで教育を行なうなら転換教育が重要となるが、一方では前述の様に転換教育が前面に出ると、接続ができない学生も生じる。

②大学のシステムの理解

進学率のアップ、大学の大衆化の結果、高度な高校生として、同一世代のうちのかなりの比率として進学した大学生は、中等教育から高等教育のシステムを理解しないままマスとして行動する。

その例をいくつかあげる。中等教育までには、学習指導要領に教育内容が定められ、それに基づき教科書が設定され、その教科書を教えられる資格としての教員免許が存在する。

したがって、教科書と参考書の間には根本的な違いがある。また教員免許は教育技量の認定ではなく、教壇に立つ資格の認定である。

大学のそれとは根本的に違うにも拘らず、教科書、先生（担任）といった類似の用語を使用するために、学生の錯覚が生じる。したがって大学の教育システムを中等教育以下と同じにするのでなければ（高等普通教育）、転換教育とそれに伴う接続教育が必要となる。

③学力の接続

高校と大学の学力の接続には3種類が考えられる。

a. 学校で学ぶ為の方法と習慣

ノートテイク、授業の受け方といった、学校で学ぶ為に通に必要となるもの、予習・復習といった学習習慣もこれに含まれる。

b. 大学で学ぶ為に必要な学力

英語や国語(文章表現)といったすべての大学での学習に必要な基礎学力であり、高校に教科「情報」が定着すれば、情報リテラシーもこれに含まれる。

c. 専門(当該の学問)を学ぶ為に必要な基礎学力

工学のための物理、薬学・栄養学の為の化学、医学の為の生物などがこれに含ま

れる。統計学や数理的(解析的)技法も必要となる学問分野がある。

※推薦入試などの拡大で、cの該当者が増え、進学率のアップでbの該当者が増加している。また全入化はaの学生を生じつつあるが、a、b、c各々の状況は大学の状況(入学難易度など)により異なる。

※a・cについては、入学前教育やリメディアル教育として行なわれることが多く、bについては、初年次教育など大学基礎教育で高校教育との接続と転換を意識して行われることが多くなっている。

(3) 大学と大学院や社会との接続教育

大学院を意識した専門教育は従来から伝統のある大学を中心に行われてきたが、それが十分に機能しなくなっており、専門教育の早期開始で対応するより、教育方法の再構築が急務となっている。

一方、社会との接続教育は二つの視点が考えられる。

○キャリア教育

主に就職の準備の為の教育が低学年から行われる様になっている。

○社会人基礎力の育成

学生は高等教育を受ける存在であると共に、成熟した社会人となる予備軍である。そこで、表2の様な社会人基礎力の育成が要請され、教育の試行が行われている。

(4) 専門教育との接続

高校と大学の接続教育がうまく行き過ぎると大学における基礎教育と専門教育の間に齟齬が生じる可能性がある。(図5.中央)そこで、高大接続を視野にいれたままでの専門教育との接続教育が必要となる。

(図5.右)最近はこの研究も始められているが、専門性は各学問分野で多様な為、高大接続教育の様に普遍性がなく、共通のカリキュラムが作成しにくい。これが今後

表2. 社会人基礎力（経済産業省 HP より）

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

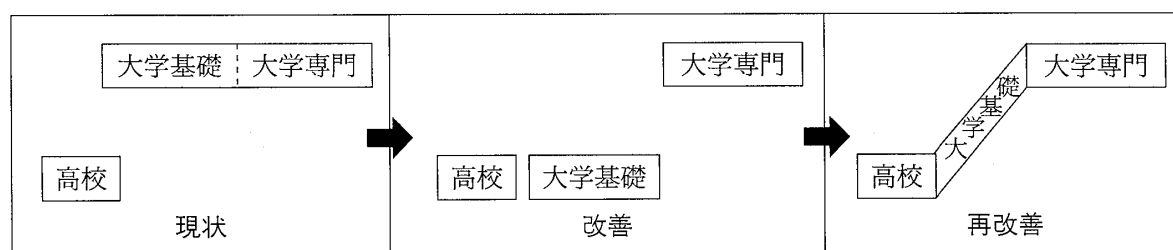


図5. 基礎教育と専門教育の接続

の課題である。

5. 大学における連携

児童・生徒・学生を主体としない連携について簡単にまとめておく。

(1) 教育機関との連携

①学校(小中高)との連携

a. 教員の研修

大学において現職教員の研修を行なう事は、教員の技量向上に役立つ。

○幼・小では、教育大学、教育学部と連携して、教員としての研修が実施され、参加希望も多い。

○高校教員は、教育大学、教育学部出身者が少なく、教科内容に近い専門分野の大学・学部出身者が多い。特に理系では、科学の進歩に対応していく為に、専門分野の研修を望む声が多く聞かれる。

※中学校はどちらとも言い切れない。

b. 大学教員の出張授業

受験の為の出前授業や理科実験授業等の一過性のものではなく、正規の授業の中で継続的に教壇に立つ。その為には、当該校の教員との協同した授業計画が不可欠である。例えば、大学コンソーシアム京都では、表3の様な授業が試みられている。

②教育委員会との連携

臨床心理士の資格を持った大学教員の派遣や、学校の第三者評価委員としての参加など。

(2) 教育機関以外との連携

①教育機関以外との連携例

例えば、文部科学省が平成15年から5年間に渡って募集した「特色ある大学教育支援プログラム」の中に、「主として大学と地域・社会との連携の工夫改善に関するテ

表3. 大学コンソーシアム京都と高校の連携授業 (2006年度)

学 校	テ ー マ	教 科	学 年	ク ラ ス 数	授 業 回 数	大 学
京都府立山城高校	化学における仮説の探求	化学 I	1	2	7	立命館
京都府立城陽高校	サプリメントを科学する	家庭基礎	3	1	5	京都府立・同志社
京都府立東舞鶴高校	新聞記事をつくろう	現代文	2	1	5	京都文教・大谷
京都市立西京高校	フィールドワーク技法	エンタープライジング I A	1	5	3	立命館・京都文教・龍谷

ーマ」が設けられたが、初年度で92件、2年目で113件の応募があった。

②企業・自治体との連携

大学との協同研究が年々盛んになっているが、企業の場合はさらに進んで冠講座を開設する事例も見られる。

6. 高大接続教育と高大連携教育

高校生から大学生へのスムーズな移行を中心にすえた高大接続教育と高大連携教育の関連を見ていく。

本来は、接続教育と連携教育は一体として語られるが、連携のない接続教育や接続のない連携教育も考えられるので、簡単に

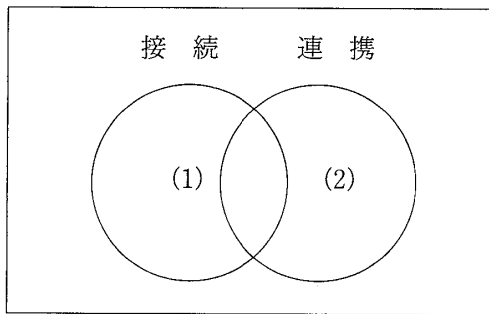


図6. 大学教育の中の接続教育と連携教育

ふれておく。

(1) 連携のない接続教育 (図6-(1))

①大学側のみによる接続教育

高校段階の学力を補償するリメディアル教育は通常、高校教員やリタイアした教員のサポートを得る事が多い。(金沢工業大学、神奈川工科大学など。)しかし、リメディアル教育ばかりでなく、生活習慣、学習習慣といった中等教育からの接続教育を高校教員の手を借りずに大学教職員のみで

行う事も可能である。(関西国際大学など。)

②高校側のみによる接続教育

広義の進路指導の中で、大学で学ぶこと、学問への動機付けなどが行われているが、高校教員のみで行なうのは少数派になりつつある。

(2) 接続のない連携教育 (図6-(2))

①生徒・学生が合同で行なう活動

音楽系のコンクール、ボランティア活動、スポーツなど、高校・大学の区別のない活動がある。(広義の接続教育と言えなくはない。)

②高大の教員が連携をして行なう活動

高校の各教科の教員で構成される研究会(社会科研究会など)やメディア教育研究会、生活指導研究会などは、高校教員と指導的立場の大学教員が連携して研究・研修を行なっている。

(3) 高校から大学へと連続した教育の為に

生徒から学生へとスムーズに移行する為には、様々な接続教育が考えられる。その実践には多様な形態が考えられるが、ここでは、高校と大学が連携するという前提で話しを進めていく。

①入学前教育

最近ではAO入試や推薦入試で早くから大学入学が決定する生徒もいる。その生徒達を他大学へ逃がさない(御守をする)為から脱却して、以下の様な入学前教育を高大連携して行なう。

- a. 動機付け…課題・小論文提出など
- b. 学習の復習…教材を与えて学習させる
- c. 基礎学力の補償…リメディアル教育
- d. 大学で学ぶ体験…ゼミ体験など
- e. 基礎スキルの学習…情報リテラシー・グループワークなど
- f. 新入生のコアとなる学生の育成

※それぞれの特色ある事例については紙数の関係で略するが、a・bは生徒へのフィードバックがないと、単なる御守にすぎず、逆に入学後の意欲を削ぐ事にもなる。またcは入学後に行なわれる事が多い。e・fについては武蔵野大学、京都精華大学の事例がある。

※高大連携は特定の大学と高校が1対1（点と点）で行なわれる事が多いが、b・c・eについては複数の高・大での連携（面と面）も考えられる。

②初年次教育（First-Year Experience）

新入生の基礎ゼミなどを含めて、最近は初年次教育ということばが定着しつつある。しかしアメリカなどにおける First-Year Experience と日本における初年次教育の内容や目的は微妙に異なる¹⁾。初年次教育に必要な要素は、表4の内容が考えられ、そのどこにウェイトをおくかは研究型大学、教育型大学、教養通過型大学といった大学

表4.初年次教育の要素

<ul style="list-style-type: none"> 1. 大学生活への適応 2. 学習技術の修得 3. 当該大学への適応 4. 学習目標・動機の獲得 5. 専門領域への理解など 6. 教養人への招待
--

類型により異なる²⁾。

さらに初年次教育を成功させるには、オリエンテーション、アドバイザー制、初年次教育のカリキュラムの3点が不可欠である¹⁾が詳細は略する。

③カリキュラムの連続性

高校の教科と大学のカリキュラムの連続

性を考えると大きく二つに分けられる。

a. 専門教育接続型

化学—薬学・栄養学、物理—工学などの様に、専門を学ぶ為に必要な教科について接続を意識したカリキュラムや指導法を開発する。統計—経済学、地歴—歴史学なども含まれる。このカリキュラムの開発には、高大接続の理科教育研究会などで教科毎に普遍的な開発を行なう場合と、私学内部において小・中・高・大の接続を意識した開発に分けられる。

b. 共通教育接続型

英語—共通教育の様にすべての大学に関係ある接続教育がある。言い換えると、高校の英語には、英語—英文学型と英語—共通教育型との2種類の要素が含まれる。後者における高大連携の方が、必要度が高いにも係らず、高校教員の協力が得にくい。

最近、国語—文章表現の接続教育が、特に重視されつつあるが、ここでも同様の問題が生じている³⁾⁴⁾。

④教育情報の接続

大学の入学選抜にあたって、高校における学習の状況（内申書）が提出される。しかし学力格差や他の理由により活用される事は少ない。しかし接続教育には、個々の生徒—学生の学習履歴は大変重要である。この為には、高大教員相互の信頼の上に成り立つ高大連携が不可欠となる。

さらに、個人のプロフィール、ポートフォリオといった教育情報は、入学間もない学生の状況を得る為に不可欠である。言い換えれば、個人の教育情報は教育の接続期にこそ必要ではないだろうか。（4年間、プロフィールを続けるかどうかとは別の次元の問題であろう。）

（4）教育場面の相互乗り入れ

さらに接続教育・連携教育を一步進めて、教育場面の乗り入れが考えられる。

①高校生が大学へ

高校生が科目等履修生などの形で大学の正規授業で学習を行なう。和歌山大学と和歌山県立高校、千葉大学のいわゆる飛び級などの例がある。高校の単位として認める、入学後大学の単位として認めるなど様々な形態がある。

また、スポーツクラブなどで大学の施設を利用して、高大合同練習を行なうなど、課外活動における事例も見られる。

②大学生が高校へ

a. 出身高校へ

出身高校へ先輩として派遣される。教育実習の様に学習サポートに入る事、先輩の立場から自大学及び学問について、オリエンテーションを行なう。(但し、入学勧誘にならない様に注意)

b. 一般の高校へ

aと同様であるが、大学や高校・教育委員会を通じて、各高校へ派遣される。ティーチング・アシスタント的な立場ではあるが、高校内に大学生が日常的に滞在する事は、接続教育の立場から高校生に有意義であろう。

③教員の相互乗り入れ

a. 大学教員が高校へ

前述、高大連携プログラムなど

b. 高校教員が大学へ

前述、リメディアル教育など

ズにする為の機関設置である。例えば、高校には校務分掌中に、大学には推進室などの組織が必要であろう。更には発展形として、第三者組織が考えられるのではないだろうか。

資料文献

- 1) 濱名篤・川嶋太津夫編著(2006)『初年次教育』丸善
- 2) 中村博幸(2005)「大学類型と初年次教育の各要素の内容」日本教育社会学会第57回大会
- 3) 中村博幸(2006)「知の外在化としての文章表現をスキルとして捉えた基礎演習」大学教育学会第28回大会
- 4) 中村博幸(2004~2006)「高校における国語・日本語能力の育成と接続」京都高大連携協議会・高大連携教育フォーラム第1分科会、第2回~第4回

7. まとめ

今回、接続教育と連携教育の意味するところの違いについて述べてきた。それは接続と連携のスタンスをはっきりさせて、うまく組み合わせる事が今後の発展につながると考えたからである。

さらに高大接続教育を発展させるためにはいくつかの課題がある。ひとつは接続期における学力チェック(ゲートウェイ)である。大学入試がその役割を果たさなくなりつつある現在、新たな方法が必要となるだろう。もうひとつは接続と連携をスムー

ABSTRACT**Education for a Smooth Transition and Partnership between Schools at Each Education Stage**

—Centering on “Kodai Setsuzoku”: transition from upper secondary schools to universities and “Kodai Renkei”: educational partnership between them—Tourism for Local Culture—

Hiroyuki NAKAMURA

Two words “Setsuzoku” and “Renkei” are not the same meaning. However, “Kodai Setsuzoku” which means education for a smooth transition from upper secondary schools to universities and “Kodai Renkei” which means an educational partnership between them are often used in the same way in the field of Education. I do not think it is appropriate.

First of all, I would like to clarify the meaning of word “Renkei”. It means a partnership between organizations sharing a same goal. In this case, we do not always consider children, pupils and students who should be most respected in education. On the other hand, “Setsuzoku” in education usually means transitions which happen to children, pupils, and students when they switch over to the next education stages, That is each transition between an elementary school, a junior high school, an upper secondary school and a university, Therefore, the education of “Kodai Setsuzoku” aims at smooth transition from upper secondary schools to universities. “Kodai Renkei” means partnership with staffs and teachers working at upper secondary schools and universities.

Now, I would like to clear both contents of “Kodai Setsuzoku” and “Kodai Renkei” in this paper. As education of “Kodai Setsuzoku”, there are various programs promoting smooth transition from upper secondary schools to universities. They are usually observed before entering universities and at the first year. Then, the education of “Kodai Renkei” does not always contain the study for pupils and students.

Based on the mentions above, this paper says the contents of the education of “Kodai Setsuzoku” utilizing the partnership between upper secondary schools and universities concretely. It is important and useful to consider the approaches to “Kodai Setsuzoku” after clarifying differences between education for transition and educational partnership.